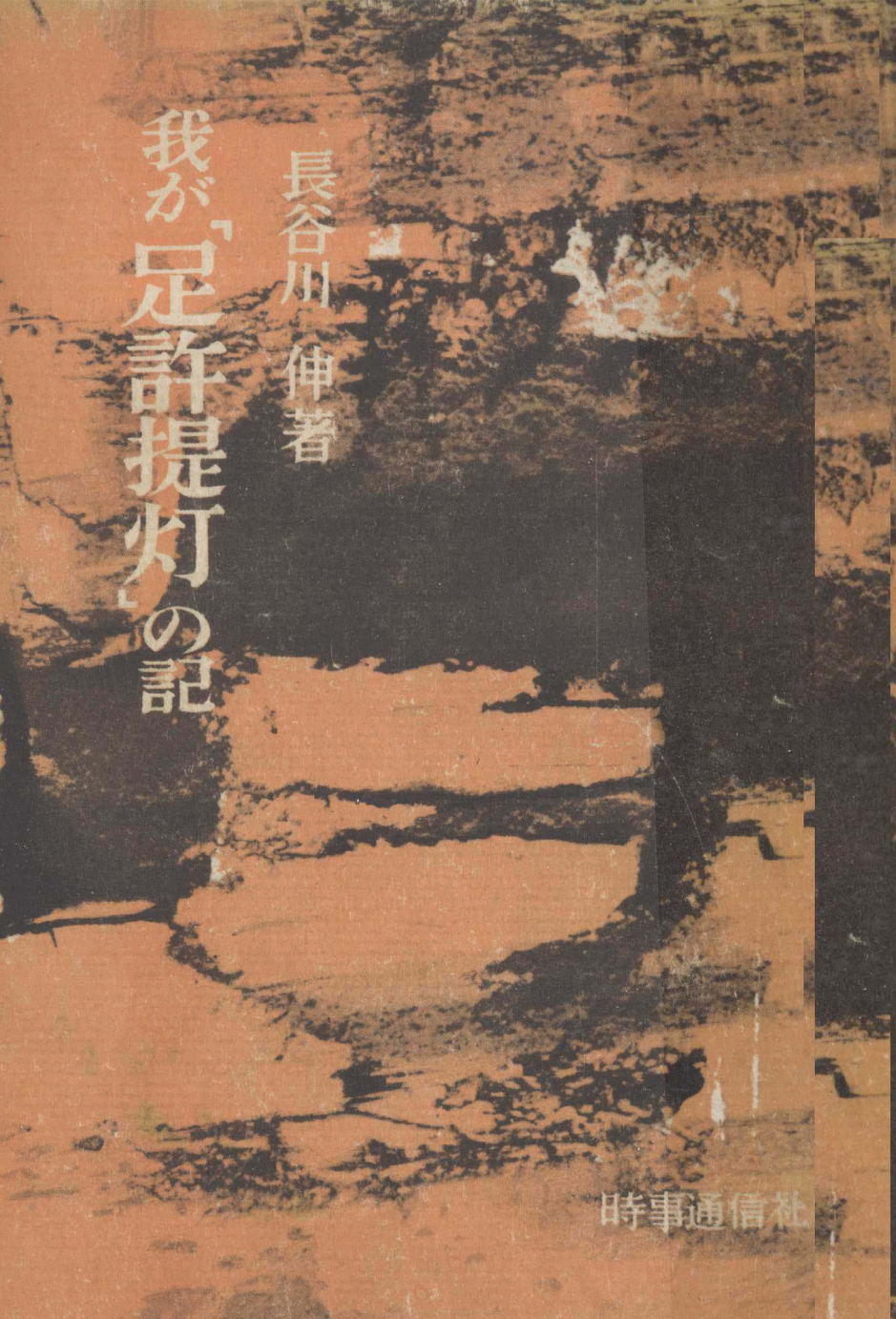




長谷川 伸著

我が「足許提灯」の記

時事通信社

長谷川 伸 著

我が「足許提灯」の記

時事通信社

——著者紹介——

は せ がわ しん
長 谷 川 伸

明治17年3月、横浜市に生まる。本名伸二郎。
尋常小学校中退(以後、学歴なし)。各種職業を
転々としたのち都新聞記者を経て大正15年7月
より作家生活に入る。「紅蝙蝠」、「寄掛時次郎」、
「一本刀土俵入」、「臉の母」、「日本捕虜志」(上・
下)等、小説、戯曲、その他の著作多し。昭和30年度
菊池寛賞受賞、昭和37年「朝日賞」(文化賞)受賞。

我が「足許提灯」の記

定価 400 円

昭和三十八年四月二十五日初版五千部

著 者 長 谷 川 伸

発 行 者 土 子 猛

発 行 所 東京都千代田区日比谷公園二
株式会社 時 事 通 信 社

印 刷 所 東京都新宿区市谷加賀町一の一
大日本印刷株式会社

発 売 所 東京都千代田区神田美土代町七
時 事 通 信 社 出 版 局

電話(二三二) 五六〇五、五六〇六
振替東京 八五〇〇〇六

目次

第一話	娘観音の話	二
第二話	捕虜と首と島	三
1	交番協の角力	三
2	一大怪物	四
3	首を抱く兵	六
4	間諜処刑	六
5	イギリス好き	三
第三話	柏のお婆さん	四
第四話	役者小勘子	四

第五話 明治のお医者

1	叱られる	四
2	改名ぎらい	五
3	眉毛売り	五
4	金のくれ方	六
5	按摩丈賀	六
6	十一世団十郎	六
1	滝七医者	六
2	秘薬安心丸	六
3	雲介唄診断	七
4	自分の首	七
5	池田と巻の話	七
6	脅喝治療	七

7	鷗外の米食説	七九
8	小便小僧の母	八〇
第六話 お使者の口		
1	シャとシェーン	八四
2	すし争い	八六
3	三汁十一菜	八八
4	二汁五菜	九三
5	義仲汁鹿葉汁	九四
6	採蘭の地	九六
7	虚をつく手口	九九
第七話 畑俊六中隊長		
1	ヨコメン	一〇一
2	四十年の後	一〇五

3	五人の親友……………	一〇九
4	五人の判士……………	一一一
第八話	女と男の巾着切……………	一二八
第九話	新五郎ばなし……………	一三三
1	鯛の顔……………	一三三
2	海の地獄谷……………	一三七
3	南方熊楠の子分……………	一四〇
4	遊女の朝飯……………	一四四
5	御下賜品以上……………	一四七
第十話	いかさま文句……………	一五〇
第十一話	渡り職人と芸と芸……………	一五六
1	江戸前の鯛……………	一六六

2	海内無双の作	一七〇
3	渡り職人	一七四
4	アバ藤	一七九
5	心太・栗餅 ところてん	一八一
6	三部屋中間	一八三
7	両面	一八四
	第十二話 交通地獄の門口	一八六
	第十三話 地震・爆弾・焼夷弾	二〇三
	第十四話 芸の“上”と“下”	二〇三
1	三津五郎と使節団	二一〇
2	外国人と『丑松』	二二三
3	文覚の荒行	二二六
4	憎まれ口	二三八

5 カンカラ太鼓……………三二

6 『活惚れ』……………三四

第十五話 母と再会の年……………三七

1 その日その日……………三七

2 角力甚句……………三四

3 タクシーの客……………四五

4 べらんめえ……………四九

5 国定忠治……………五一

6 貫録とマ……………五三

第十六話 あの時この時の賊……………五五

1 宙を渡る鞆……………五五

2 “蔵前駕籠”……………五七

3 井伊大老の首……………六二

4	社長の車	三五
第十七話 或る婆さん爺さん		
1	小説中の人	三七
2	映画宣伝の昔	三七
3	親が教わる	三七
4	零落	三八
5	結婚式	三八
6	婆と爺と	三八
第十八話 ある舌ある顔		
1	五島慶太	三八
2	浪曲塔	三九
3	大阪と東京	三九
4	百足屋 むかでや の娘	三九

5	天ぷら蕎麦	三〇一
第十九話 その時の米兵		
1	女の哀訴	三〇四
2	罐詰めと米兵	三〇六
3	赦免状	三二〇
4	憎まれ者	三二四
5	ナイフ投げ	三三六
	あとがき	三三〇

我が「足許提灯」の記

第一話 娘観音の話

1

近松物や源氏物語、枕草子などに就いての著書のある小林栄子という老女が、中秋名月の日、滋賀県大津に宿をとり、昼のうちに石山寺に詣で、源氏の間とか月見堂とかを見て宿にもどり、夜になるのを待ち、石山寺で満月をみようと出かけてはみたが、大阪の方からきた月見客の群集に揉まれながら、石の多い路を足もとくらく上ることの覚束なさに、ひとり瀬田川べりで佇んでいた。

そこへ石山寺から下りてきた品のいい娘さんが、どうぞなされてかと問うが如く顔を向けたので、栄子は問わず語りに、上るのも大変なのでどうしようかと思つて、というその娘さんが、ご一緒しましょう、も一度わたくし、おまいますと、京都弁でいうより早くハヤ踏み出して栄子をふり返った。

それから栄子はこの娘さんの深切と舐^{いたわ}りにささえられて、石山寺の秋の月をながめ、やがて下山して街にもどり、宿のちかくで別れるとき、京都はどちらと尋ねると、娘さんはこればかりのことに恩がましく、とでもいう如く、「ほ」といって微笑したらしく、御所のそばでございまして、勿論それも京都弁で、しかもその云い方が耐らなくいいので栄子は、振りかえりなどせずに行^いくその娘さんのうしろ姿を、真昼のような月の下で見送った。

人混みにやがて紛^{まぎ}れてしまったその娘さんは、銀兎地に墨絵で一面の芒と秋草のきもの、赤地の糸錦らしい帯であった。栄子はその娘さんを忘れかねて、宿にもどる心になれず、瀬田川べりをそぞろ歩きしているうちに、あの娘さんがこの観音さまの化身^{けしん}でもあるように貴くおもわれ出した。

このことを栄子が、昭和十四年九月二十七日の夜、小石川の幸田家で、幸田露伴に話すと、露伴は「その娘がおもしろいですね。そんなのを昔の人は観音様にしてしまうんですね」といった。このことは『露伴清談』（小林栄子）にある。その本には露伴が、楊貴妃は美女よりも才女であることの方がずっと上だ、彼の女は鸚鵡に般若心経を暗誦させたくらいだという話などが出ているが、私には今いった娘観世音のことが深く高く大きく面白い。

私どもは今の話の娘さんのやり方を「通りがかりの奉仕」「念（こころ）の贈りもの」といって

いる。坂路で車のあと押しをしてあげるのも、迷い子を助わるのも、おなじくこれ、通りがかりの奉仕としているが、それにしても月下の娘観世音は美しい。

2

淡路源之丞一座という淡路の人形浄瑠璃が、大阪の大毎ホールで公演するので、頼まれて加わった興津三次郎さんが、公演がかわって淡路島へもどる途中、眼鏡のネジがぬけて片っ方の腕がとれてしまったので、神戸の中突堤にある待合室で、淡路行きの船を待つあいだに、一時のマに合わせに、糸でくくり付けようと考えたが、糸がないので、隣りに腰かけていた二十ぐらいの娘さんに、糸のもちあわせがあったら少々くださいと頼んだ。娘さんはよく探したが持ちあわせていない、連れの二人の娘にもその娘さんが尋ねてくれたが矢張りなかった。と今いった娘さんが、糸を何におつかいなさるのかと尋ねたので、眼鏡のネジがぬけたのでと三次郎さんがいうと、娘さんがそれはお困りでしょう、まあ見せてくださいと云うので、眼鏡をみせると、じっと見ていたが、うまく出来るかどうかわかりませんが、付けてみましょうかと、頭髮のうちから毛ピン一つとって、眼鏡のネジ穴とくらべて見て折ろうとするので、そんな事までしていただいては済みませんと、三次郎さんがいうより先に、娘さんは手早く折って、それをネジの代わりにさし込み、

前後の端を折りまげ、ほんのマに合わせですみません、これで暫く辛抱してくださいと、眼鏡をわたした。掛けてみるとまことに良く直っていた。

三次郎さんはその娘さんの気転と深切に心をうたれ、田舎おやじの私にかように深切にしていたでいて、誠にもったいないことでと礼をいうと、いえいえ滅相な、わたしはこのあいだお祖父さまが急に亡くなったので淋しく、せめて出来ますことなら、よそのお年寄りのお世話でもと心がけておりますが、思うばかりで何もできませんでしたが、お役にすこしでも立ったのなら嬉しうございますという。三次郎さんいよいよ感動して、私の孫娘もやがてあなたのような娘さんになってほしいと思いますといったところ、いえお恥ずかしいことです、それではわたし達の乗る船が出ますのでお別れいたします、ご無事にお帰りなさいますようにと、その娘さんは挨拶して、連れの二人の娘ともども、別府行きの船へ乗りにいった。

三次郎さんはそのうしろ姿を、暫くのあいだ、我れをわすれて見送っているうちに、淡路行きの船が出るといふ知らせで、我れに返ったがしかし、せめてあの娘さんの名前だけでも聞いて置けばよかったのに、忘れていたのが心残りだとすぐ心付いた。

その日は好い天気で、海もおだやかであったから、母の故郷の松山へまいますと云っていたあの娘さんは、無事な船旅を連れの娘たちとしてのことだろうと、安心して家へ帰り着いた三